

令和7年9月12日

乳製品需給等情報交換会議における御意見

東宗谷農業協同組合

- 北海道は全体的に生産量が伸びている状況。一方で、牛乳の消費量がこれからもう少し伸びてくれることを望んではいるが、厳しい状況であるとも感じている。
- 今後、脱脂粉乳の在庫量は増加する見通しとなっている中で、飲用需要が厳しくなると、脱脂粉乳の在庫量がさらに増加していくのではないかと心配している。
- 北海道の暑さによる影響は、思ったほど出ていない。ここ数年、生産者の方々も暑熱対策を講じており、生産量の落ち込みは大分抑えられるようになってきている。ただ、先日、道北では水害が発生し、2番草が泥をかぶって飼料に使えない状況になっている。今後、自給飼料の生産はこのような天候の影響を大きく受けていくように思われる。
- 令和8年度以降の生乳生産量が大きく減少することを心配している。今後、行政にも相談の上、どのように対策するか検討していきたい。
- 乳製品も大事だが、まずは飲用乳の消費拡大を全生産者で頑張っ取り組んでいかないといけない。そうした中で、バターと脱脂粉乳の輸入枠数量は、当初設定したカレントアクセス内の数量に留めていただきたい。

ホクレン農業協同組合連合会

- 北海道の生乳生産は、7月下旬に全道的に厳しい猛暑に見舞われ、一時的に生乳生産が大きく減少したが、現在は回復基調にあり、8月の実績は102.5%となっている。
- 一方で、8月の乳代精算をみると、一部の乳成分には影響が出ている。バターの乳脂肪分は、前年比で0.02ポイント程度下回る結果となった。ただ、それほど大きな影響はないと感じている。
- 今後、需要については、猛暑や物価高の影響を注視していく必要がある中で、Jミルクの見通しでも、脱脂粉乳の在庫は積み上がり、バター在庫についても3.2万トンと見込まれていることからすると、現状の輸入枠について、変更する状況にはないと考えている。
- 脱脂粉乳とバターの跛行性が存在している中で、脱脂粉乳の在庫に対して、全国で取り組んでいるセーフティネットの枠組みの活用や、国の支援を受けた中で、この対応を進めていくことは大切なことだと考えている。今春、需給ギャップがある中での生乳処理には非常に苦労した。今後、このギャップの解消に向けて、関係者一丸となって需要拡大に取り組んでいきたいと考えているので、よろしくお願いしたい。

一般社団法人中央酪農会議

- バターの年度末の在庫量は、Jミルクによれば、4.9カ月分の出回り量に相当する3.25

万トンとなっており、ある程度の在庫量を確保できているのではないかと考えている。

- 生乳生産の動向については、都府県においても記録的な猛暑と言われているが、生産量は思いのほか落ちず、むしろ好調に推移している状況である。現在のところは、Jミルクの予測以上に、これからの生産量が若干上振れする要素があると考えている。
- 価格については、バターに加え、牛乳類でも今年8月に値上げがなされている。8月のPOSデータだけ見ると、販売量は大きく落ちてはいないが、まだ値上げをし切れていない乳業者もあると聞いており、飲用需要が予測から下振れする要素がある。そう考えると、Jミルクの予測以上にバターの製造量が増えることは十分あり得るので、輸入枠数量は現行の水準を据え置く方向で進めていただきたい。
- 併せて、脱脂粉乳は在庫量が増加する中で、需要拡大に向けて全国的に生産者団体が乳業と一緒にあって取り組んでいかないといけないと認識している。これから不需要期に向けて一層取り組んでいくので、引き続き、ご指導ご支援をお願いしたい。

一般社団法人 Jmilk

- 2025年度の生乳生産量は、前年並みと見込まれる。北海道では、引き続き前年を上回る水準が維持される一方、都府県では4年連続で前年を下回ると見込んでいる。
- こうした中、6月に乳製品向け乳価、8月には飲用向け乳価が引き上げられ、需要面では製品価格の値上げが市場に徐々に影響をあたえてくると考えられる。
- 脱脂粉乳の需給は飲用向けの減少、チーズ向け、生ク等向けの減少により、脱バ等向けが前年を上回る見込みのため、生産量が増加し、年度末在庫は期首在庫を上回り、積み増す見通しである。
- 一方、国産バターについては、依然として単年度の需要量が国内生産量を上回る状況が続くと見込まれるが、製品価格改定の影響もあり、大きな過不足による市場の混乱は生じないと見込まれる。
- この様な需給状況の中、牛乳乳製品の需要拡大が重要であり、業界全体で国産牛乳乳製品の価値や魅力を発信し、消費者に訴求していくことが必要である。
- また、生乳需給の構造的な課題として、脱脂粉乳の過剰在庫とバターの供給不足という需給不均衡がある。この解決には、脱脂粉乳の有効活用を促進するための新製品開発や需要創出が急務である。

一般社団法人日本乳業協会)

(生乳生産)

- 本年度の生乳生産は、災害級の猛暑といわれているが、北海道でも暑熱対策が進んでおり、生産量の急激な減少に伴う飲用需給上の大きな混乱はないと認識している。一方、主力である2歳以上（特に2～4歳）の雌牛の減少傾向を反映して、年度後半から減少に転じると見込まれている。しかしながら、①6月からの乳製品向け乳価及び8月

からの飲用向け・発酵乳向け乳価の引き上げにより生産意欲が高まり、配合飼料給与量が増加して搾乳牛1頭当たり乳量が増えていることに加え、②国が長命連産性の向上を推進している中で、計画的な生乳生産抑制が実施された中で早期の淘汰が進み、現在の5歳以上の雌牛は淘汰後の牛になるので、残存率も想定以上に高くなる可能性がある。

- こうした結果、本年度産の自給飼料の品質いかんにもよるが、生乳生産は想定よりもやや上振れする可能性がある。

(バター)

- バターについては、6月からの乳価引き上げに伴い価格改定がなされたものの、輸入バター価格も高止まりしていることから、国産品に対する需要は比較的堅調に推移している。他方、前述のとおり、生乳生産は昨年度を僅かに下回ると見込まれているものの、やや上振れする可能性が高い一方、飲用需要は価格改定により落ち込みが想定されることから、バターの生産は前年度を僅かに上回るものと見込まれる。

(脱脂粉乳)

- 脱脂粉乳については、最大の需要先である発酵乳やアイスクリーム類向けの需要は比較的堅調に推移してきたが、価格改定の影響による輸入調製品へのシフトなど、需要の減少が懸念されている。他方、生産については、バターの項で記載したことと同様の理由により、前年度を僅かに上回るものと見込まれる。
- このため、脱脂粉乳の需給は、依然として緩和傾向が続くものと見込まれる。

(まとめ)

- 以上のような需給見通しを踏まえ、国家貿易によるバター及び脱脂粉乳のカレント・アクセス輸入については、1月に発表された輸入枠数量を変える必要はないと考える。

卸売業者【業務用】

(バター)

- 引き続き国産バターの物量割り当ては継続されており、新規に関しては国産がないので外国産で代替されるケースも見受けられるが、為替などの要因で海外産バターも高値安定となっており、食品製造事業者側も国産、海外産バター共に使用に関しては積極的ではない。
- しかし、国産バター限定で使用する食品製造事業者が多く、国産の表示を変えたくないというユーザーも多いので、国産バターの更なる安定供給の対策が求められる。

(脱脂粉乳)

- 需給に関し供給面に現状不安はない。当初、夏場の生乳生産が懸念され、拡販体制ではなかった一部メーカーでは余剰があるようで、スポットではあるが、安価な条件で得

意先に提案されている状況が見受けられる。

- ただ、大口需要家は安定供給に比重を置き、来期の生乳生産を懸念していることから購入には慎重であり、安価なスポット品を買い求める食品製造事業者は一部に限定される。

卸売業者【家庭用】

- 市販用バターは引き続き、売場におけるバター欠品は無く、供給は順調であると認識している。市場においては、2025年3月の価格改定に続き、7月にも主要メーカー各社による乳価改定に伴う改定があったため、市販用バターの動向としては、25年度の需要拡大の要素は乏しいと捉えている。
- 弊社の市販用バターの供給（納品率）に関しては大きな影響はないが、納品数量においては価格改定の影響もあり、前年を割っている状況である。
- また、主要メーカー各社の家庭用商品におけるバターの在庫としては、適正であるという声が多いが、搾乳牛の減少や天候（長引く暑さ）など不安視する声も聞こえた。欠品することの無いように供給面をカバーいただくよう、一層の連携をお願いしている。
- 引き続き、生乳生産量や、外食・インバウンド需要などを注視しながら、需給調整の一翼を担うべく尽力していく。

一般社団法人全国スーパーマーケット協会

- 牛乳は5月から7月にかけて特売の効果が限定的となり、前年を下回る状況が続いた。
- 一方でヨーグルトは堅調に推移した。プレーンやフルーツ入りを中心に安定した需要があり、大きな落ち込みは見られなかった。一方で機能性タイプなど一部商品の販売は低迷した。
- チーズやバターなどは、価格改定の影響が大きく、前年を下回る推移が続いた。
- 乳酸菌飲料はこれまで売上を牽引してきた高価格商品の伸び悩みにより低調な推移となった。
- 今後の動きとして、猛暑の影響から乳量の低下による乳製品への原料供給減、結果的に商品供給が不安定になるのではないかと、懸念がある。
- 関係のみなさまには、商品の安定供給をお願いしたい。

一般社団法人日本パン工業会

（バター）

- パンの消費とその生産の動向については、最近少し持ち直しつつあったが、暑さのせいもあり、基本的には従来とあまり変わらない動向が続いている。したがって、パンに使用する乳製品の需要についても基本的には変わっていないという状況。

- 価格面では、国内での乳価の引き上げがあったものの、国内産バター価格が外国産バター価格を下回る傾向が継続していると認識している。
- 量の面では、在庫量が前年を上回る状況が続いているようではあるものの、必ずしも潤沢にあるとはいえず、前年を相当程度上回る量の確保が難しいため、新製品での使用が難しい状況にある。
- 価格や付加価値の面で優位な国産バターの供給量を増やしていただきたいが、脱脂粉乳の在庫がより多くなることが危惧されるのであれば、外国産の輸入枠拡大も検討していただけると有り難いと考えている。

(脱脂粉乳)

- ひっ迫感はない。過剰感があるのか、一部の原料供給サイドから使用拡大要請の話もある。

協同組合全日本洋菓子工業会

- 会員からの報告になるが、前回（本年6月）以降、バターの需給状況には大きな変化はない。国産バターについては、仕入先からの供給が前年並みにとどまり増産や新商品の製造を考えている場合に支障をきたしているケース、昨年減量されたまま供給量が回復しないケース、本年10月以降現状比さらに供給量を2割減量されることとなっているケースなど様々であり、全体からみると改善の兆しは見えていない。今後の供給に大きな不安がないとする企業は、元々輸入バターの使用比率が高いか、やむなく国産から輸入バターまたは代替品に転換を図った自助努力の結果と見られ、品質や商品の特徴にこだわりの強い多くの洋菓子製造企業にとっては依然、国産バターの供給面で大きな不安を抱えている。
- また、価格についても国産、輸入共に依然上昇が続いているか高止まりの状態が続いている。
- 牛乳の生産者など供給側の事情、バターと脱脂粉乳との跛行性の問題などに対し即効性のある解決策が直ちには見いだせない現状において、需要側としては、年末の需要期に向け、バター全体の総量を増やすことにつながり需給の緩和や価格の引下げに資すると考えられる輸入バターの供給量の増加とその販売方式の工夫についてご検討を要望する。

全国菓子工業組合連合会

- 輸入バターの価格が高止まりしている中、国産バターの価格も上がっている。風味などの問題で国産しか使えないユーザーもいるので、国産バターの増産、持続的な安定供給をお願いしたい。
- 国産バターの供給は、前年同を上限とする供給制約が続いていると伺っている。これは、コロナ禍による需要減から十分に回復する前に始められており、需要回復に向けた

製造増加の足かせとなっている。輸入バターで賄える需要については、輸入バターで十分量を供給することで、国産バターへの引き合いを減らしていただき、輸入においては、国内の需要に十分対応できるだけの供給を確保していただきたい。また、小規模企業者枠のSBS入札については、利用者が増えない理由をよく分析して、より使いやすい制度の改善をお願いしたい。

一般社団法人全国消費者団体連絡会

- 観測史上最も暑かった今年の夏、生乳生産への影響を最小限に抑えるために、酪農現場で様々に取組まれた「暑熱対策」を含む飼養管理に感謝します。
- 供給面において欠品や品薄などの混乱は全く感じていませんが、コメをはじめ食料品全般が値上がりする中で、牛乳・乳製品の店頭価格も上昇し、消費者の買い控えや節約志向が継続していることは納得できる傾向かと思われます。価格に敏感な消費者にとって、家計が厳しいときに牛乳の優先度が低くなることや「毎日飲む習慣」から遠くなってしまうことは仕方のないことかもしれません。
- 一方で、全体的に需要が減少している中でも、健康志向の高まりによって、発酵乳、特に機能性ヨーグルトやプロテイン入り乳製品など、付加価値付きの商品が人気との情報を耳にしました。これらの傾向を分析し、世代別アプローチ（高齢者向けに免疫機能や栄養強化、若者向けにプロテインとか低脂肪とかトレンド商品など）に目を向けることも、消費拡大の面で大切ではないかと感じます。
- またこの夏、連日のように熱中症による健康被害報道がある中で、Jミルク等が発信した「牛乳は熱中症を防いでくれる効果的な飲み物」という情報はとてもタイムリーで有意義に感じました。「炎天下の外出や運動の直後に牛乳を飲みましょう！」などの情報がテレビ番組の中でも扱われ「牛乳が暑い夏に効果的」という発信は、おいしさだけでなく、消費者の心に響いたと思います。
- 引き続き、需要拡大に向けて、国産牛乳・乳製品の価値や魅力を積極的に発信しながら、消費者への訴求力を高めていくことが重要と感じています。

（以上）